

タイトル: 13歳からの地政学—カイゾクとの地球儀航海—

- ・ 出版社: 東洋経済新報社 初版発行: 2022年3月・発売日: 2022/02/25(246ページ)
- ・ 利用対象: 中学生 高校生 一般



著者: 田中孝幸(たなか たかゆき)

国際政治記者。大学時代にボスニア内戦を現地で研究。新聞記者として政治部、経済部、国際部、モスクワ特派員など20年以上のキャリアを積み、世界40カ国以上で政治経済から文化に至るまで取材した。大のネコ好きで、コロナ禍の最中に生まれた長女との公園通いが日課。40代で泳げるようになった。

商品説明

1. 説明の語り口は平易で、読みやすく、だが中身は正確であり(偏らず)、興味深い。多くの日本人が読むべき本ではないだろうか。又、最後(エピローグ)での、年齢不詳の男「カイゾク」の生い立ちを確認して頂きたい。
2. 大きな国の苦しい事情、絶対に豊かにならない国々、地形で決まる運不運…。高校生と中学生の兄妹と年齢不詳の男「カイゾク」との会話を通じて、国際情勢やニュースの裏側、国同士のかけひきを楽しくわかりやすく解説する。

プロローグ カイゾクとの遭遇

- ・ 年齢不詳の「カイゾク」と呼ばれる男と、高一の「大樹」と妹の中一の「杏」が、夏休みの7日間、レッスンを受ける約束をする。
- ・ 最終日のテストに合格したら、ディプロマットという地球儀がもらえるという約束。

1日目 物も情報も海を通る

□海を支配する最強の国

- ・ 実は世界中の貿易は9割以上が海を通っている。
- ・ アメリカが超大国と言われているのは、世界の船の行き来を仕切る国であるからだ。

□なぜドルが世界中で使われるのか

- ・世界の貿易の8割で使われる通貨はドルだ。そしてそれは、アメリカが世界で最も強いからだ。

□みんなが船で運ぶ理由

- ・世界の大陸の中でも、安定して確実に物を運べるようになっている地域はほんの一部だ。

□海底でデータが盗まれる

- ・これらの海底ケーブルなしにはインターネットは成立しない。そしてアメリカは世界で一番多くの海底ケーブルを張り巡らせている。
- ・海をおさえれば、情報をおさえることができるからだ。
- ・データが通る場所をおさえれば、世界中のデータを盗み見して、ほかの国が知られたくない情報を得ることができる。
- ・情報というのは集めすぎると、それは持っていないことに近くなっていく。

□世界最強のスパイ組織が負けた理由

- ・目標やそのための計画がなければ、どんなに強力な武器があっても、どんなに重要な情報を手に入れても、それを使いこなすことは難しい。

□世界で一番大きな深海を持つ国

- ・水深 6,000メートル以上の深海だけをみると、世界で最も大きい海水体積を持っているのは日本だという報告もある。

□経済成長って何？

- ・日本人は日本を小さな島国と言うが、世界での存在感で言うと大国の部類に入る。

□日本も移民の国だった

- ・日本はもともといろいろな種類の人を溶け込ませてきた、移民の国だった。

1日目のまとめ5点(本文より)

- ① 世界の貿易のほとんどが海を経由し、海を支配するアメリカが世界の仕切り役になっている。このためアメリカのドルが世界中の貿易の大半で使われている
- ② アメリカは自国通貨で外国から物を買う事ができるので、豊かになっている
- ③ 世界のほとんどのデータは海底を経由し、海の支配は情報をおさえることにつながる
- ④ 情報はたくさん集めても、分析して使えなければ持っていないのに等しい
- ⑤ 経済成長の度合いは人口と技術の伸びによって決まる

2日目 日本のそばにひそむ海底核ミサイル

□カイゾクって何者？

□核ミサイルはどこにある？

- ・核兵器は通常、他の国にわからないところ、海に隠されている。核兵器を持っている国は、米露中など9か国と言われている。

□核を最強のアイテムにする3つの条件

- ・ (1)いつまでも潜っていられるための原子力潜水艦、(2)海の中からミサイルを発射する力、(3)潜水艦を隠すための深く、自分の縄張りにできる安全な海。この3つを完全に持っているのは米露だけ。露は米対策としてオホーツク海に原潜を潜らせている。

□中国が南シナ海を欲しがる理由

- ・ 中国は(3)である南シナ海を支配し、アメリカと対等になることを目指している。

□国際法って何？

- ・ 中国は今の国際ルールは、そもそも欧米に都合よくできていると考えているから、守ろうとしない。
- ・ 世界の国々が国際社会でともにもうまくやっっていこうということで作ったルールには、かなりの重みがある。

□日本が核爆弾を持つ日は来るのか

□「遠交近攻」というテクニク

- ・ 日本の遠交近攻は、米中の仲が良くないから成り立っているとも言える。

□国の位置が外交を決める

- ・ 一番大事なのは口を聞きたくない程いやな敵を作らない。自分の国だけでなく、それぞれの世界に良いところがあることを知る姿勢が必要。

2 日目のまとめ4点(本文より)

- ① 核兵器は(1)原子力潜水艦、(2)海中からミサイルを発射する能力、(3)深く安全な海、の3つを揃えてはじめて最強のアイテムになる。
- ② 中国は(3)である南シナ海を支配し、アメリカと対等になることを目指している。
- ③ 遠くの国と仲良くして近くの国の脅威に対応する「遠交近攻」は地政学の王道である。
- ④ 日本がアメリカと同盟を組んで、中国に対する立場を強めようとするのも遠交近攻の一環である。

3日目 大きな国の苦しい事情

□世界一の広さの大陸

□陸続きの国境はどうなっているのか

- ・ 長い陸続きの国境は管理が難しく、領土を守るのにも大きな困難がともなう。

□なぜ領土を求めつづけるのか

- ・ 中国など多くの大国の侵略的な行動には、自国を守ろうとする心理が強く働いている。

□独立運動が起きるわけ

- ・ 国を持っていない少数民族は、差別されていれば、独立を志向する。

□治安維持に年20兆円を使う中国

- ・ 中国の治安維持費は、国防費よりも大きくなっていて、20兆円を超えているという話もある。
- ・ 新疆ウイグルとかチベットのような少数派である民族は、豊かになるプロセスからはじき出されやすい。

□中国の防犯カメラは何のため？

- ・ 防犯カメラには、市民にとっての防犯だけでなく、政府にたてつく行動を減らすという目的があるのだ。

□なぜ戦争を起こそうとするのか

- ・ 民主主義の利点は、暴動やギロチンがなくてもリーダーを代えられるということにつける。
- ・ 中国は、その仕組みがないので、下手をすると国民に殺されると、リーダーたちは思っているのです。
- ・ 戦争で勝てば、国民にリーダーであることを納得させやすくなる。

□記者に銃を向ける国

- ・ 記者に銃を向けるような国は、それよりずっと前に自分の国民に銃を向けている。

3日目のまとめ5点(本文より)

- ① 長い陸続きの国境は管理が難しく、領土を守るのにも大きな困難がともなう。
- ② 中国など多くの大国の侵略的な行動には、自国を守ろうとする心理が強く働いている。
- ③ 少数民族を多く抱える大国は、独立や反政府の動きをいつも必死におさえこもうとしている。
- ④ 選挙を行う利点は、暴力や流血なしに政権を代えられることにある。
- ⑤ 戦争に勝ったカリスマでなければ、選挙なしにリーダーであり続けるのは難しい。

4日目 国はどう生き延び、消えていくのか

□勉強嫌いの杏

□自分の国がなくなった友人

- ・ 戦争で負けるというのは、往々にして国がなくなることを意味する。

□平和はバランスから生まれる

□なぜ王様は必要とされるのか

- ・ 天皇家や王家を維持するのにはお金がかかるが、それを大きく上回るメリットがあるからここまで続いているのだろう。

□王様と首相のワークシェア

□権力を持つ王様が減ったわけ

- ・ 君主制と共和制のどちらが適しているかは、多くの条件により変わってくる。どちらが正しいとは言えない。

□7つに分かれた国

□なぜ大きな国の人々は外国語が下手なのか

- ・ 日本人が外国語を話さない大きな理由は、人口が多く、経済が世界3位で、話す必要がなかったから。
- ・ 国民の英語力が高いのは、圧倒的に小国が多い。1位:オランダ、2位:オーストリア、3位:デンマーク、など。

□だまされないための知識

- ・ 知識を増やすということは、騙されないように武装するということ。それをそれぞれの人間が知るべき。

4日目のまとめ4点(本文より)

- ① 小国は遠交近攻で近くの大国に圧倒されないように、必死のバランスをとっている。
- ② 伝統ある王国には、国家を一つにまとめて協力し合えるようにする力がある。
- ③ 多くの国では、王様と政治家は、多忙な国の代表としての仕事をワークシェアしている。
- ④ 通常、国が分裂すると一般市民の生活は苦しくなる。

5日目 絶対に豊かにならない国

□なぜアフリカにはお金がないのか

□お金は血液と同じ

- ・アフリカが貧しい最大の理由は、それは国のお金を、政治家が海外に流しているからだ。

□アフリカに悪いリーダーが多いわけ

- ・国境となった境界線が無理やり引かれたことも背景にある。

□お金持ちの国にお金が行く仕組み

- ・自分の国に税金をできるだけ払わないために、タックスヘイブンを使おうとする政治家たちは、欧米にたくさんいる。
- ・民族問題が大きい国では、なかなか民主主義は機能しない。

□なぜアフリカ産のチョコレートを見かけないのか

- ・貧しい国だから儲からない仕事を担わされて、そのために貧しいままに続けるという悪循環が起こっているのだ。
- ・欧米人は歴史上、有色人種を、奴隷や劣る人間として扱ってきた歴史の方が、長い。
- ・現実には、世界では建前で言われているきれいなことと、実際に起こっていることが大きく違うことも多い。

□「安くて良い物」の危うさ

- ・異常に安くて良い物は、何らかの人々の犠牲がともなっている物だと考えていい。
- ・「差別」の反対語は、「交流」。

□多民族でも豊かになった小国

□アフリカから見た日本

- ・世界は一握りの強い国々、つまり加害者の国々と、植民地にされたことのある被害者の国々の二つに分類できる。
- ・世界では被害者の国々のほうが、圧倒的に多い。そして、日本は加害者側の国だ。

□貧しさから抜け出す方法

- ・貧しさは誰の責任ではないということにしたいから、欧米のリーダー達は、アフリカの貧しさは厳しい自然・天災ゆえと広めた。
- ・差別やいじめ、不正をなくすことに効果的なのは、関心を持つことだ。

5日目のまとめ4点(本文より)

- ① アフリカが貧しい最大の原因は、お金が欧米などに大量に流れ出ているためである。
- ② アフリカの政治家が国民のお金を着服するのは、国境となった境界線が無理やり引かれたことも背景にある。
- ③ 民族や部族の争いが多い国では、選挙を行っても国内は安定せず、発展しにくい。
- ④ 多民族国家でもシンガポールのように、同じ国民としての意識を高めて豊かになった例もある。

6日目 地形で決まる運不運

□終戦記念日の朝

□世界一ラッキーな土地アメリカ

- ・アメリカは、恵まれた場所にあり、そういう良い条件はそうそう変わらないので、21世紀もアメリカは世界一であり続けるだろう。

□テロリストとヒーローの違い

- ・テロリストが悪者かそうでないかは、それぞれの国の立場によって違って来る。テロリストがヒーローになった国もある。
- ・テロ戦法は強い国にとっては困りもので、最大の敵だが、弱い立場の人々にとっては有効な戦い方になっている。

□世界に目が向かない大国

- ・自分の母国語しかしゃべれないのをモノリンガルというが、アメリカや中国、ロシア、日本などほとんどの大国では、モノリンガルの方が偉くなる傾向がある。

□朝鮮半島の不運な地形

- ・朝鮮半島は、周りの大国(中国、ロシア、日本)の圧力を受けやすい位置にある。
- ・しょっちゅう攻められてしまう半島には、主に3つの特徴がある。一つ目は、大きな国と国の間に挟まれていること。
- ・二つ目は、ほかの国との境目に川や山など、大きな自然の障害物がないこと。三つ目は、豊かな資源や農産物、便利な港といった貴重なものがあることだ。欲しがるものをみんな持っているのに、攻められやすい地形だということ。

□韓国人でロシア国籍のヤマモトさん

- ・自分が属している民族が中心となっている国に住めるというのは、当たり前のことではない。

□敗戦を天災とした理由

- ・日本は、敗戦記念日ではなく「終戦記念日」とした理由は、敗戦のネガティブな記憶をいったん封印して、前向きに日本を復興させることを優先させたから。みんなで復興に向け協力するために、意識的に責任は一握りのリーダー達だけにあるとした。
- ・戦後、戦争責任論が高まれば、国民をまとめる存在として貴重な天皇家を潰してしまえという議論になる可能性があった。

□なぜ過去のことが蒸し返されるのか

- ・日本と韓国のお金の問題は、戦後しばらくして両国で結んだ条約で解決した、との立場を日本は取っていて、おそらく法律論では日本の方が正しい。しかし、世界には韓国に同情的な意見もある。世界では、植民地として支配された国の方が多い。
- ・過去のネガティブな歴史というのは、多くのケースで、今の社会問題の原因だととらえられているから。

6日目のまとめ5点(本文より)

- ① アメリカが超大国となったのは、地理的条件に恵まれていることが大きい。
- ② 大国は他の国に目が向きにくく、無知からテロや戦争を引き起こしてしまうことがある。
- ③ 朝鮮半島のように大国に囲まれた土地は、争いに巻き込まれやすく、独立を保つのが難しい。
- ④ 日本が敗戦を天災のようにとらえたのは、復興のための知恵だったが、マイナス面もあった。
- ⑤ 黒人差別などの社会問題が残る限り、関連するネガティブな歴史は蒸し返され続ける。

・7日目 宇宙からみた地球儀

□夢がないのは悪いこと？

□地図上で最もゆがんでいる大陸

- ・南極は世界で5番目に大きな大陸で、98%が氷でおおわれている。40を超える越冬基地があり、どの国の領土でもないことになっているが、そんな約束は一気にくつがえされるかもしれない。

□誰でもスパイにされてしまう国

- ・中国人は誰でもスパイになりうるという法律が中国にはある。どんな中国人も世界のどこにしようが政府に協力しないといけない
- ・内向きな中国は外国との付き合いに慣れていないため、世界中でトラブルを起こしている。

□情報もタダほど高いものはない

- ・今のネット環境では、信頼のあるメディアの記事を読んだ方が安全だろう。

□温暖化で地球儀はどう変わるか

- ・北極海の温暖化は、ロシア人にとっては、悪い事ばかりではない。寒すぎるロシアにとっては、天然資源を掘り出しやすくなる可能性を広げてくれるものとして、地球温暖化をポジティブにとらえている人もいる。温暖化は、立場によって見方が変わってくる。

□なぜ日本は東の果ての極東と呼ばれるのか

- ・ヨーロッパを中心として世界を見ることを、日本人が知らず知らずに受け入れている。
- ・アメリカの首都であるワシントンから見れば、東京は遠いところにある田舎に過ぎない。例えば、北朝鮮のミサイルのニュースは、自分たちの生活には関係ないと思っているようだ。欧米にとって、関心の高い問題は危険な国であるロシアだった。
- ・だが、最近は、アメリカの地位を脅かすようになってきた中国に関心が出てきて、その関係で日本にも関心が寄せられている。

□宇宙の地政学

- ・宇宙空間を巡って各国により宇宙開発・競争が進んでいるが、結局のところ、未来が平和であるかどうかは、人次第だ。
- ・世界はどんどん良くなっている。人間は思ったよりもしっかりした生き物だ。これからも世の中は、良くなるだろう。
- ・最後の質問「自分にとっての世界の中心はどこだろうか？」

7日目のまとめ4点(本文より)

- ① 内向きな中国は外国との付き合いに慣れていないため、世界中でトラブルを起こしている。
- ② 無料で得られるネット上の情報にはうそも多く、信頼性を確認するのは難しい。
- ③ 地球温暖化を天然資源の開発を助けるとしてポジティブにとらえる国もある。
- ④ 歴史上、強い大国は自らが中心であるという世界観を他国に受け入れさせてきた。

エピソード カイゾクとの地球儀航海

- ・カイゾクから二人への「手紙」と「ディプロマツトという地球儀」。

以上